

中国語学習へのモチベーションを高めるための試み

～寸劇を通して～

An Attempt to Enhance the Motivation of Chinese Language Learners —Through the Introduction of Skits—

王 俊

Wang Jun

Abstract

In this study, we tried to explore what elements are necessary to create a skit that is supposed to improve the Chinese-learning motivation of the audience who have been learning Chinese. Based on the creative practice of the three skits performed at the Chinese speech contests of our university from 2017 to 2019, we found that three elements - "amusing elements", "teaching things", and "interaction between the players and the audience"- are essential for the skits which can lead to the improvement of the Chinese-learning motivation of the audience. Furthermore, on the players side, it turned out that the skits had the effect of improving players' motivation to learn Chinese and improving their ability of speaking Chinese. Therefore, we are going to do further study on Chinese education through skits.

キーワード

中国語寸劇、モチベーション、楽しさ、教えるもの、交流

1. はじめに

本学で毎年開催されている中国語スピーチ大会は、観客数 200 人超えの盛大なイベントで、そのうち約 8 割が中国語の初心者という位置づけである。来場した 150 人超えの中国語初心者の学生達に、中国語の楽しさを伝えること、さらに中国語学習へのモチベーションを高めることを目的とし、2017 年よりスピーチ終了後の 5 分間で本学の学生による中国語寸劇の上演を取り入れることとした。

本稿は、2017 年～2019 年度の 3 年間に上演した中国語寸劇の実践を元に、来場者の中国語学習のモチベーション向上のための寸劇創作試み及びその問題点についての研究である。また、寸劇への出演による出演者側の中国語教育効果の期待についての考査でもある。その実践と考査の結果に基づき、今後本学で上演を目的とする中国語寸劇教育を課題として検討したい。

2. 寸劇創作の狙いと試み

2017 年度より、毎年度本学で開催する中国語スピーチ大会で、余興として、中国語寸劇の創作に携わることとなった。その狙いは、下記の通りである。

1. 来場者に楽しんでもらうためである。

2. 来場者の中国語学習のモチベーション向上に繋がるためである。
3. 出演者の中国語学習のモチベーションと中国語能力の向上のためである。

2.1 2017年度中国語寸劇①《小新和小都》

寸劇を通して、いかにすれば、来場者を楽しませることができるのか、いかにすれば中国語の魅力を伝えることができ、中国語への学習意欲の向上に繋がるのかを考えた。初めての試みで、以下のような工夫をした。

1) 台本の設定について

学生に親しみやすい身近な設定とし、「本学一年生」、「中国語を学習中」「本学の中国語メディア教材」のキーワードを中心にして作成した。なぜなら、観客の8割は一年生で、かつ中国語を学習しているからである。また、中国語を学習している学生であれば、だれでも一度本学の中国語メディア教材を経験したことがある。メディア教材で問題を間違えたときに出る「アッオー」の音、正解したときに出る「パチパチ」の拍手の音も取り入れることにした。メディア教材を経験した学生であれば、それらの音による悔しさ、うれしさなど、さまざまな感情を思い起こすことであろう。より親しみやすい狙いであった。また寸劇の分類について、学生に一番受け入れやすい「ラブストーリー」という設定とした。

2) 中国語の台本の作成について

来場した観客の一年生の中国語の語彙量は少なく、中国語の学習についてただやってみようという軽い気持ちで始まった学生が多く、中国語学習のモチベーションが割と低いと言うことを配慮した。そこで、寸劇のセリフはできるだけ、彼らが習ったことのある単語を取り入れる工夫をした。例えば、本学中国語入門の教材の内容を意識し、“学生”“一年級”“喜欢”“爱”“同学”“作业”“非常好”など教材で取り上げている馴染みやすい語彙を盛り込むようにした。理解ができることから達成感を味わってもらうことを狙った。

3) 楽しい要素を取り入れる

学生が興味の湧きやすい「歌」「ダンス」「笑い」のこの三つの要素を取り入れることにした。それについて、イタリア語劇を研究している暇(2016)は出演者がプロの役者のように演技だけ観客を楽しませることが難しいため、語劇には「笑い」「歌」「ダンス」など学生が興味を持つような楽しい要素が必要であると、筆者と同じ見解を示していた。分かりやすい笑いとして「女装」を取り入れ、主役の女子役を当時一年生の男子にした。歌については今の大学生ならば、ほとんど知られているラブストーリーの設定にぴったりの「アナと雪の女王」の名曲「とびら開けて」の中国語版に決定した。歌は会場で原曲を流すのではなく、歌担当の出演者による生歌の披露であった。その狙いは会場を盛り上げるだけではなく、中国語のアピールの一環でもあった。ダンスについては、歌担当の歌声に合わせ、主役の二人により披露をした。

2.11 寸劇①の内容と流れについて

まず出演者が PowerPoint を用いて、寸劇の背景を中国語でナレーションを行った。以下は中国語のナレーションの内容となる。

“小新是爱知淑徳大学一年级的学生。他很喜欢学习，很喜欢中文、还很喜欢跳舞。他不仅中文学得好、跳舞跳得好，还爱乐于助人。小都是爱知淑徳大学一年级的学生。她是一个很害羞的女孩子。她不喜欢学习、不喜欢中文、也不喜欢跳舞，但是她很喜欢小新。因为小新总是帮助小都：

小新：“同学，你没事儿吧？你的鞋掉了！”

小新：“同学，你的钱包掉了！”

小新：“同学，你的书掉了！”

小新：“同学，你的…你的…东西掉了！”

渐渐地，小都喜欢上了小新……有一天，小都终于鼓起了勇气……”

ナレーションで使う PowerPoint は下記図 1～図 4 のように、中国語と日本語の両方を入れることにした。



図 1 主役の紹介①



図 2 主役の紹介②



図 3 主役たちの出会い

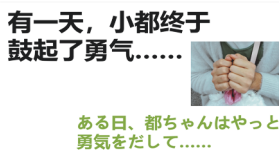


図 4 その後主役たちの登場

ナレーションの後、すぐに主役が登場し、歌担当の出演者は、舞台の横で歌い始めた。歌声に合わせて、主役が舞台上で踊り出して、寸劇のクライマックスを迎えた。下記図 5～図 7 はその時の様子である。

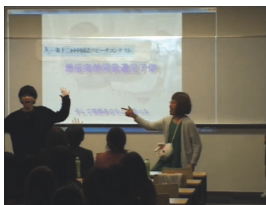


図 5 主役の登場



図 6 歌の披露

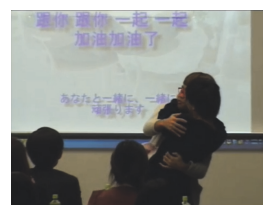


図 7 主役によるダンス披露

2.12 寸劇①を振り返る

分かりやすい簡単な演出にするため、寸劇①は PPT を用いた中国語ナレーションと出演者たちによる歌とダンスの披露の二つの部分から構成されている。セリフよりも歌とダンスで表現した方が一年生にとって、わかりやすく、かつ受け入れやすいのではないかと考えたからである。歌担当の出演者が歌い始

めたところ、男子の二人が登場し、面白く踊っていた場面では会場から笑いを誘い、大きな拍手が上がっていた。大会の後には、多くの学生から、すごく楽しかったという感想を伺ったことから、この寸劇①は来場者を楽しませようという目的が達成できたと言える。

しかしながら、楽しい要素の「笑い」「歌」「ダンス」とらわれすぎで、主役の二人は舞台上で会話を交わすことが少なかったことについては問題を感じた。それは観客が見て楽しいだけで終わってしまうのではないかと危惧していたからである。佐野(1977)は「英語劇のすすめ」では「優れたドラマは、楽しませかつ教えるものでなければならないのです」と述べている。来場者を楽しませるという目的だけを見れば、2017年度の寸劇①はその目的に達成したと言える。しかし楽しいものだけで終わって、来場者に教えるものがなければ、中国語学習モチベーションの向上というもう一つの目的には繋がりにくいという課題が残った。

2.2 2018年中国語寸劇②《再聚》

2017年度の続編として作り上げた寸劇②は《再聚》であった。劇を作り上げたまでのプロセスと構成は2017年度とそれほど変わりがなかった。ただ台本を考える際に、寸劇①の問題点を改善するために、教えるものにしようと、まず舞台上で中国語の会話をできるだけ取り入れることとした(図8を参照)。会話の内容は実際本学の中国語会話①②の教材で取り上げられた日常会話を意識して作成した。会話の内容はPowerPointでそれぞれ中国語と日本語訳を観客たちに提示していた。(図9参照)

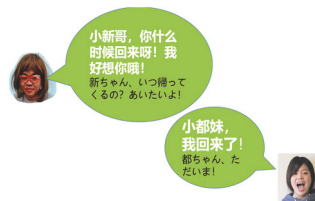
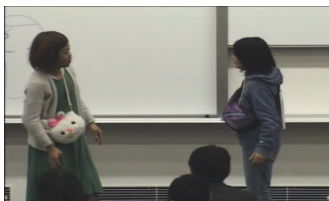


図8 主役たちが会話を交わす場面 図9 PPTによるセリフの提示

そのほかに、出演者の中国語能力のアピールと中国の文化を盛り込むようにした。例えば、中国へ留学に行っていたという設定の主役に中国の万里の長城、九寨溝とパンダ基地などの中国の名所、火鍋、蘭州ラーメンなどの中国の食文化も紹介してもらうように工夫した。中国語能力のアピールの場として、出演者に中華料理の名物である“餃子”“包子”“凉拌三丝”“鱼香肉丝”“麻婆豆腐”“烧肉”“锅包肉”“锅肉”“涮羊肉”という九つの中華料理の名前を8秒以内に、できるだけ速く言えるように、学生と共に何度も何度も練習を重ねた。また出演者が覚えやすいように、料理名を何度も変更しただけでなく、発音指導の際にリズムを付けることによって、この難関を無事にクリアすることができた。実際の会場では、このシーンは一番の拍手を得ることができた。

歌は2017年度の寸劇①と同じく「とびら開けて」の中国語版であるものの、次の2点で改善を図った。その1つ目としては、2017年度と違い、歌担当の出演者には舞台の横で歌うのではなく、舞台の真ん中に登場して歌を歌いながら、キレキレのダンスを披露してもらった(図10を参照)。2つ目としては、スクリーンにカラオケ感覚で歌の歌詞を映し出すことにより(図11を参照)、来場者も一緒に歌える

ように工夫した。こうした工夫によって、会場の雰囲気をもっと盛り上げることができた。

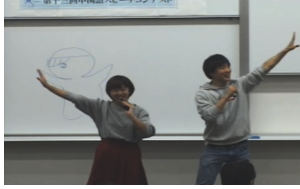


図 10 歌とダンスの披露

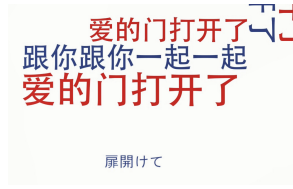


図 11 歌詞の字幕

2.2 寸劇②を振り返る

2018年度の寸劇②は2017年度の寸劇①の問題点を踏まえ、楽しい要素の「歌」「ダンス」「笑い」を取り入れながら、5分という短い時間制限の中で教えるものとして、会話、文化を盛り込むことができた。しかし、問題点として、一方的に中国の情報、中国語能力を見せつけ、観客の学生は完全に受け身となり、自ら積極的に中国語学習を取り込むことまでは影響が薄いのではないかと考えた。羅(2012)は日本語教育の際に、教師は自分の講義だけに集中し、学生の感情、知識への受け入れ状況に目を向けないのは極めて間違いであり、学生に自ら積極的に学習に取り込む姿勢をさせるのは教育効果をもっとも果たせるものだとして述べている。もし寸劇を教育現場だと考えたならば、舞台上に上る出演者側は、教員となり、舞台の下にいる来場者は受講生となる。教員側は、受講生に何かを伝えることも必要ではあるが、受講生と交流を深めることによって、学習への積極性を引き出すことのほうがもっと大切である。よって、いかにすれば、寸劇で出演側と来場者側との交流を実現させることができるのかは、大きな課題だと感じていた。

2.3 2019年中国語寸劇③《中文課》

寸劇①及び寸劇②の問題点を踏まえ、寸劇③を作成する際、来場者のモチベーションの向上に繋がる「楽しい要素」「教えるもの」「観客との交流」という三つの要素を取り入れるよう工夫した。その結果、寸劇③のテーマを《中文課》にした。寸劇③は寸劇①と寸劇②とはまったく違うスタイルの寸劇であった。出演者が先生を演じ、200人を超える観客を生徒として、生の中国語の授業をするという設定であった。ダンスと歌の指導が必要でないので、準備作業は寸劇①と寸劇②よりは簡単であった。寸劇③はPowerPointを中心に展開する寸劇であるため、PowerPointを作成する際に、以下のような工夫をした。

- 1) 観客となる「生徒」の8割は初心者であるため、PowerPointの内容を極力分かりやすく、簡単なものにしようとした。
- 2) 学生にとっては、興味のある内容に選定し、中国語の面白い常識、中国語の意外と間違いやすい言い方及び簡単な早口言葉などを取り入れた。
- 3) 本学の中国語教材で取り上げた会話、単語を意識し、教材で登場していた馴染みのある人物の“田中美香”“鈴木静子”を寸劇で登場する先生の名前へと設定した。細かいところまで拘って、より馴染みやすいものとするように工夫した。
- 4) 出演者の「先生」と来場者の「生徒」との交流を図るために、寸劇③にクイズを取り入れた。クイズのやり取りを通して、出演者の「先生」と来場者の「生徒」の交流を深め、最後に早口言葉という共

同作業で「先生」と「生徒」の一体化を図った。

- 5) インパクトのある PowerPoint の作成を通して、笑いを誘えるように工夫した。下記の図 12～図 16 は実際会場で使用していた PPT の一部である。

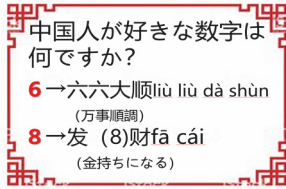


図 12 常識クイズ



図 13 間違いやすい中国語表現

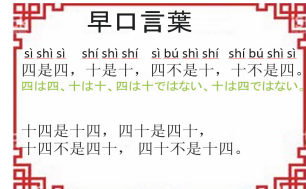


図 14 早口言葉



図 15 インパクトのある PPT によるクイズ



図 16 インパクトのある PPT によるクイズ

2.31 劇の流れ

・実際に先生を演じる学生は PPT を操作して、次々と中国の常識あるいは中国語についてのクイズを来場した学生に聞くという流れであった。以下の図 17～図 19 はその時の様子である。



図 17 「先生」の登場

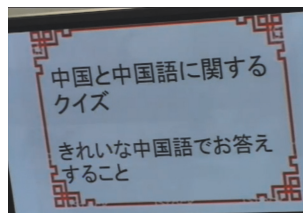


図 18 スクリーンに映っている PPT

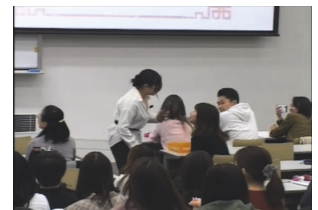


図 19 「生徒」が回答中

2.32 寸劇③を振り返る

寸劇でありながら、中身は一味違う正真正銘の中国語授業であった。この新鮮さに興味を示したように、実際会場では最初から最後まで笑いと拍手が止まらなかった。観客の学生は積極的にクイズに答えて、積極的に「先生」について、中国語の発音の練習もした。会場の状況から見ると 2019 年度は一番成功したのではないかと感じた。成功へとつながる大事な役割を果たしていたのは劇の授業内容、つまり PowerPoint の内容が一つの要因だと考える。また、先生を演じる出演者達は「生徒」とのやり取りを臨機応変に対応し、テンポよく授業を進めていたことが今回の成功の一つの要因だと考えた。

2.33 今後の課題

2017 年度～2019 年度の寸劇創作の試みは単純に観客の中国語学習者を中国語寸劇で楽しませることがか

ら、観客の中国語学習のモチベーションの向上へと、徐々に進化してきた。2017年度～2019年度の寸劇台本の試行錯誤と問題点で、モチベーションの向上に繋がる寸劇作成には「楽しい要素」「教えるもの」「観客と交流」のこの三つの要素は欠かせないものだと考えた。今回の試みを活かし、観客としての学生達を対象に、中国語学習モチベーションの向上を狙う寸劇の研究をこれからも深めていきたいと考えた。さらに、実際の教育現場にもこの三つの要素をできるだけ取り入れるようにすることによって、教育現場の教育効果を高める試みをしていきたい。

3. 寸劇による中国語教育効果の期待

一方、寸劇に出演していた中国語学習者の学生達は、寸劇への出演により、中国語学習のモチベーションまた中国語能力向上の教育効果が期待できるのだろうか。寸劇への出演により、中国語会話力が向上できるかどうかの研究として、劉（2013）のものが挙げられる。劉（2013）はアジアの学生は中国語学習する時、欧米の学生に比べ、明らかに発言の積極性、活動的に欠ける傾向がみられると指摘しつつ、寸劇はその弱点の突破口として、中国語の会話能力を伸ばす教育効果が期待できると述べていた。また日高（2012）は大学教育に於ける英語劇上演の意義として、英語教育の多様化と実践的指導の充実化、個人個人の読解力やリスニング力のみならず、表現力とコミュニケーション力も高めることができると述べている。さらに、啜（2016）は語劇による「話す」「聞く」「読む」「書く」という4技能の取得以外に社会で活躍するスキルを身に付けることが可能であり、また高い動機付けを持続させることができると述べている。寸劇による言語の習得はよい教育効果が期待できることは数々の先行研究から示唆された。実際、本学の2017年度～2019年度の寸劇に参加していた学生達にアンケート調査を実施したところ、以下のような回答が得られた。

1) 2017年度寸劇①の参加者の感想（抜粋なく、原文のまま）

- ・もともと中国語は楽しいと思っていたから、より楽しく劇に出ることができたという感想です。中国語を学ぶ初歩として楽しそうだと思うことは大切だと思います。
- ・劇を演じることにより、自分達の中国語力の向上や自分達自身を発信することができた。周りに評価されることの素晴らしさを理解した。
- ・中国語の成績は単語、文法ともに苦手意識がありましたが、友達と一緒に中国語の歌を覚えることで楽しく中国語の勉強することができました。学年を超えた交流もあり、いい思い出になりました。

2) 2018年度寸劇②の参加者の感想（抜粋なく、原文のまま）

- ・大学の講義内では学ぶタイミングが少ない単語（料理名、歌、地名、早口言葉等）を学ぶことができた。このタイミングで中国の歌を聞くきっかけができた。日常会話の文章と触れ合えて、留学生生活を思い出すことができた。座学ではない中国語学習との接点を見出す方法の一つとして、自分にみあった学習方法を未だに見出せてない大学生にはきっかけを感じとらせるという点でとてもよい機会になるのではないかと思う。
- ・中国語で歌を歌ったのがきっかけで中国のアーティストの曲もいろいろ聞くようになり、歌詞を見て歌えるように自分で練習したりするようになりました。歌を覚えるとフレーズで中国語を覚えることが

できたので HSK で役に立ったこともありました。

- ・劇を終えてから学校などで声をかけて、先輩後輩の繋がりを広くすることができました。劇を通して、後輩、先輩、先生とのつながりが深めて、やってよかったと思う。
- ・中国語劇は基本的に中国語での会話がベースとなっているので、スピーチとは違い、日常使う言葉の勉強になりました。相槌や語尾につく言葉（日本語でいう「～だよ。～ね」）、冗談まじりの言い方など、教科書にはあまり出てこない言い回しが使えてとても面白いなと思いました。そして、劇をやるにあたって自分のセリフを何回も何回も練習するので、今自分が発している言葉がどういう意味なのかを捉えながら自然と覚えることができました。何より、中国語劇はやっていてとても楽しかったです。皆がいるから、勉強している気分ではなく、遊び感覚で中国語を覚えられました。“楽しい” はやる気に繋がる一番いい要素だなと思いました。

3) 2019 年度寸劇③参加者の感想（抜粋なく、原文のまま）

- ・講義形式のセッションは、問題レベルが1年生に合わせて作られていた。下級生が問題に対して悩んで回答している場面を見ると、4年間の中国学習の成果を感じとれた。ひたすら教科書とにらめっこする学習より、面白い PowerPoint と共に学習することで学習意欲も湧いてくると感じた。発表後、PowerPoint の印象が強くてあの問題の～と同級生から突っ込まれた。印象の強い PowerPoint を使うことで頭にその単語を染み込ませやすいと感じ、『人の印象に残す』ことは容易ではないがストーリーとして学習すると頭に物事が入りやすいのかもしれないと感じた。
- ・留学帰国後からだいぶ日にちが経っていたので、発音には気をつけるようにしていました！また、先輩として参加をしたのですが、中国語をペラペラに話せる、すごい！と思ってもらえるよりも、中国語って面白い！と思ってもらえるように、語学力の凄さより楽しさを重視するようにしていました。

上記の参加者の感想から寸劇の出演を通して「楽しく勉強ができた」「寸劇の参加がきっかけで、HSK に役立ったことがあった」「学習意欲が湧いた」といった中国語学習へのモチベーションの向上と中国語能力の向上につながったことが分かった。また「自己表現ができた」「交流が深めた」などの効果も見られた。これらの感想から、中国語寸劇による教育の可能性及び教育効果があることが分かった。教育を目的とする寸劇の場合、教員と学生の役割について、「教員は完全な裏方であり、主体は学生である」としている（暇, 2016）。一方、寸劇による語学教育にあたって、陈琳ら（2007）は、教員は知識の伝達者よりも、むしろ科学の設計者、活動の指導者及び問題の解決者であると同時に、教育の審査員でもあるようにしなければならないと主張している。いずれにしても、語劇の教育を取り上げることは教員に多様性の指導能力を問うこととなりうるであろう。

まとめと今後の研究課題

今回の中国語寸劇の作成及び上演についての研究を通し、寸劇の作成にあたって、観客のモチベーションの向上につながる大事な要素は、「楽しい要素」「教えるもの」「観客との交流」という三つの要素であることが分かった。これからも、この研究を引き続きしていき、寸劇を利用する中国語教育の可能性を

模索していきたいと考えている。また寸劇の参加によって、中国語の学習モチベーションと中国語能力向上の教育効果が見られたことで、上演を目的とする寸劇の教育の将来性が示された。

ところで、今回の試みはすべて教員が台本の作成を行った。しかし、上級レベルの学生に台本を作らせることができれば、もっと学生視点のよい寸劇ができるのではないかと考えている。2017年度～2019年度の台本作成の経験を元に、学生への台本作成指導を今後の研究課題だと考えている。

参考文献

- (1) 啜 絵里「語劇による教育効果の多様性」『人間文化研究』 2016-10
- (2) 刘 珍秀. 浅论对外汉语口语课堂教学实践活动之短剧表演[J]. 剑南文学：经典阅读, 2013:370-370
- (3) 罗兰「关于大学二外日语教育有效途径的探析」四川外语学院重庆南方翻译学院 大学教育 2013
- (4) 日高真帆「英語劇の上演と大学教育への応用」『京都女子大学大学英文学会文学論』第56号 2012 P14
- (5) 佐野正之『英語劇のすすめ』大修館書店, 1997年, P14
- (6) 李枫. “课文剧”在对外汉语教学中的应用[J]. 现代语文：下旬. 语言研究, 2012:111-111
- (7) 陈琳, 程晓堂, 高洪德, 张连仲. 英语教学研究和案例 [M]. 高等教育出版社, 2007 [2]